

生駒市内遺跡発掘調査概要報告書

2005年度

2006年3月

生駒市教育委員会

生駒市内遺跡発掘調査概要報告書

2005年度

2006年3月

生駒市教育委員会

例　　言

1. 本書は、2005（平成17）年度に実施した発掘調査および整理作業の成果を主として掲載した概要報告書である。
2. 調査は、調査原因者の依頼を受けて、奈良県教育委員会および奈良県立橿原考古学研究所の指導のもと、生駒市教育委員会生涯学習振興課 矢田直樹が担当した。
3. 現地の土色および土器の色調は、『新版 標準土色帖 1999年版』を参考にしている。
4. 遺構写真は矢田が、遺物写真は城下、矢田が撮影した。
5. 調査記録、出土遺物等は、生駒市教育委員会において保管している。
6. 調査および本書の作成にあたり、下記の方々からご指導・ご協力いただいた。記して謝意を申し上げる次第である。（敬称略・順不同）

寺澤 薫	西藤清秀	近江俊秀	平松良雄
岡林孝作	清水昭博	米川仁一	深澤芳樹
吉川真司	小川暢子	千田嘉博	
山川 均	佐藤亞翌	重見 泰	
7. 現地調査および本書作成にかかる整理作業には、下記の方々の協力を得た。

安達 崇	池田計彦	石田和哉	井上大介	大木祥太郎
岡田雅彦	岡本怜嗣	来山良子	木下一誠	島田佑子
城下奈美	中居惣子	西本英夫	福井英行	松原智子
8. 本書の執筆・編集は、矢田が行った。
9. 調査にあたりまして、事業主の皆様には多大なるご協力をいただきました。感謝申し上げます。

裏表紙　　文化財愛護のシンボルマーク

両手のひらと日本建築の伝統的要素である組物（くみもの）をイメージしたパターンを3つ重ねることにより、過去・現在・未来にわたる永遠の伝承を表現したものです。

目 次

目次

I 埋蔵文化財調査の概要	1
II 位置と環境	2
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
III 中葉畠・一水口遺跡第8次調査	6
1 調査の経過	
2 位置と環境	
3 遺跡の調査	
4 まとめ	
IV 中葉畠・一水口遺跡第10次調査	12
1 調査の経過	
2 位置と環境	
3 遺跡の調査	
4 まとめ	
V 田原口城跡第7次調査	16
1 調査の経過	
2 位置と環境	
3 遺跡の調査	
4 まとめ	
VI 払の口遺跡第1次調査	19
1 調査の経過	
2 位置と環境	
3 遺跡の調査	
4 扜の口遺跡での立会調査	
5 まとめ	

図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 地形図	3
第2図 主要遺跡分布図	4
第3図 調査地周辺遺跡分布図	6
第4図 調査位置図	7
第5図 調査区遺構平面図	8
第6図 調査区南壁土層図	9
第7図 溝1 (SD101) 土層図	10
第8図 出土遺物実測図	11
第9図 調査区配置図	12
第10図 トレンチ2・3 土層図	13
第11図 トレンチ1 遺構平面・土層図	14
第12図 出土遺物実測図	15
第13図 調査地周辺分布図	16
第14図 調査位置図	17
第15図 調査区配置図	17
第16図 出土遺物実測図	18
第17図 調査区配置図	19
第18図 調査区 下層遺構平面・土層図	20
第19図 出土遺物実測図	21
第20図 出土遺物実測図	21

図版目次

図版1 中葉畠・一水口遺跡第8次調査	1 着手前状況	2 遺構検出状況
図版2 中葉畠・一水口遺跡第8次調査	1 遺構掘削後状況	2 遺構掘削後状況
図版3 中葉畠・一水口遺跡第8次調査	1 溝1掘削後状況	2 溝1掘削後状況
図版4 中葉畠・一水口遺跡第8次調査	1 溝1堆積状況	2 溝1堆積状況
図版5 中葉畠・一水口遺跡第8次調査	1 溝1遺物出土状況	2 出土遺物
図版6 中葉畠・一水口遺跡第10次調査	1 着手前状況	2 遺構検出状況
図版7 中葉畠・一水口遺跡第10次調査	1 遺構掘削後状況	2 土坑1掘削後状況
図版8 中葉畠・一水口遺跡第10次調査	1 土坑1遺物出土状況	2 土坑1遺物出土状況
図版9 中葉畠・一水口遺跡第10次調査	1 土坑2掘削後状況	2 トレンチ2掘削後状況
図版10 中葉畠・一水口遺跡第10次調査	1 トレンチ3掘削後状況	2 出土遺物
図版11 田原口城跡第7次調査	1 着手前状況	2 トレンチ1掘削後状況
図版12 田原口城跡第7次調査	1 トレンチ1北壁土層	2 トレンチ2東壁土層
図版13 田原口城跡第7次調査	1 トレンチ2遺物出土状況	2 出土遺物
図版14 坂の口遺跡第1次調査	1 着手前状況	2 上層遺構検出状況
図版15 坂の口遺跡第1次調査	1 中層・下層遺構検出状況	2 流路遺物出土状況
図版16 坂の口遺跡第1次調査・立会調査	1 第1次調査出土遺物	2 立会調査出土遺物

I 埋蔵文化財調査の概要

生駒市では、高度経済成長期以降、土木工事等の開発行為が急速に進み、地理的環境・歴史的環境が大きく変化している。それにともない、遺跡はその姿を消しつつある。

このような状況のなかで、生駒市教育委員会では、1987年に市内の遺跡分布調査を実施し、「生駒市遺跡分布調査概報」を刊行した。1990年に新たな調査成果をもとに、「生駒市遺跡地図」の改訂を行った。その後も、奈良県立橿原考古学研究所や生駒市教育委員会の調査等により遺跡範囲の拡大や新規発見が相次いでいる。これを受けて2004年に「生駒市遺跡地図」の改訂を行い、保護に努めている。

2002年度（平成14年度）から2005年度（平成17年度）まで、生駒市教育委員会が実施した発掘調査は第1表のとおりである。近年、埋蔵文化財発掘届出の件数は増加の傾向にある。

本書には、今年度、整理作業を実施した中葉畠・一水口遺跡第8次調査、中葉畠・一水口遺跡第10次調査、田原口城跡第7次調査、坂の口遺跡第1次調査の調査概要を収録している。

年度	番号	市道跡番地圖番号 県道跡地番号	遺跡名	調査地	現地調査 期間	調査原因 (原因者)	調査面積 (m ²)	備考	
2002 (14)	1	31 4-A-5	儀口北窓跡	儀口町220-1一部 ほか	020415	宅地造成 (有機社会いこま丘研)	2mf	遺構・遺物なし	
	2	80 4-D-22	遺物散布地	生駒町1丁目298- 1, 298-2	020422	共同住宅 (個人)	2mf	出土内工事	
	3	51 4-D-29	中葉畠・一水口 遺跡	中葉畠2丁目1137- 1, 1138-1(第2次)	020422	個人住宅 (個人)	2mf	生駒市文化財調査 報告書第16集所取	
	4	64 4-D-52	遺物散布地	生駒町1丁目300-6 の一部ほか	020603	分譲住宅 (個人)	2mf	出土内工事	
	5	54 4-D-1	一分コヨリ遺跡	也水町1198の一部 (約62m ²) ほか	020919	共同住宅 (個人)	4mf	遺物伝達層を検出	
	6	36 4-A-7	坂の口遺跡 (第1次)	儀口町1069-1ほか 021010	021067～ 021010	老人福祉施設 (個人)	20mf	本書Ⅳ所取	
	7	54 4-D-1	一分コヨリ遺跡 (第7次)	岩谷町1198-1 1196-4の各一部 ほか	021022～ 021023	共同住宅 (個人)	14mf	既往時代の田河遺 跡を検出	
	8	51 4-D-39	中葉畠・一水口 遺跡	中葉畠2丁目 1117, 1118 ほか	021090	マニショングラハ (株式会社シティ・プランナー)	3mf	中葉の濠・ピット を検出	
	9	21 1-D-15	佐原遺跡	北田原町1995-1の 一部 1996-2	021225～ 021226	個人住宅 (個人)	4mf	生駒市文化財調査 報告書第16集所取	
	10	51 4-D-39	中葉畠・一水口 遺跡	中葉畠2丁目1135- 8 ほか	030224～ 030225	個人住宅 (個人)	7mf	生駒市文化財調査 報告書第16集所取	
	2003 (15)	1	66 4-D-36	萩原遺跡 (第12次)	萩原町266-1, 265-1 の一部	030601～ 030502	個人住宅 (個人)	7.5mf	生駒市文化財調査 報告書第17集所取
	2	66 4-D-36	萩原遺跡 (第14次)	萩原町454, 456-2 各一部	030804～ 030806	個人住宅 (個人)	5mf	生駒市文化財調査 報告書第17集所取	
	3	80 4-D-32	遺物散布地	東牛町1丁目298-1 (約48m ²)	030805	共同住宅 (個人)	2mf	約1.5mの盛土	
	4	51 4-D-39	中葉畠・一水口 遺跡(第18次)	中葉畠2丁目1073- 3ほか	030512～ 030630 030731～ 031024	店舗 (株式会社オーカワ)	1,500mf	本書Ⅳ所取	
	5	79 4-A-2	遺物散布地 (第19次)	東駒ヶ丘1175-59	031020	個人住宅 (個人)	4mf	遺構・遺物なし	
	6	54 4-D-1	一分コヨリ遺跡 (第1次)	老松町1195-1の 一部	031104	共同住宅 (個人)	2mf	出土内工事に設計 変更	
	7	48 4-D-47	小平尾遺跡	小平尾町203-1, 202-2 (第2次)	040308	個人住宅 (個人)	3.6mf	生駒市文化財調査 報告書第17集所取	
	2004 (16)	1	81 (第1次)	跡ヶ丘1452の一部 ほか	040628	遺灰用施設 (高岡高専株式会社)	10mf	遺構・遺物なし	
	2	66 4-A-2	遺物散布地 (第2次)	西松ヶ丘35- 41 (第2次)	041004	店舗行きマニション (個人)	5mf	遺構・遺物なし	
	3	41 4-A-15	長の寺古跡	西松ヶ丘1581- 42, 1581-45 2934	041124	個人住宅 (個人)	5mf	遺構・遺物なし	
	4	51 4-D-39	中葉畠・一水口 遺跡(第9次)	西葉畠町1496-3, 1496-4 041203	041219～ 041208	個人住宅 (個人)	35mf	生駒市文化財調査 報告書第19集所取	
	5	53 4-C-5	案内塔跡	西葉畠町1663- 32 041208	041208	個人住宅 (個人)	4mf	生駒市文化財調査 報告書第19集所取	
	6	51 4-D-39	中葉畠・一水口 遺跡(第10次)	中葉2丁目 1129-1 041215～ 041221	041215～ 041221	老人福祉施設 (社会福祉法人岡崎福祉会)	53mf	本書Ⅳ所取	
	7	32 4-A-6	田原口城跡 (第1次)	後川町191-1, 920-1 050127～ 050128	050127～ 050128	宅地造成・分譲住宅 (大庭美産株式会社)	25mf	本書Ⅳ所取	
	2005 (17)	1	31 4-A-5	儀口北窓跡	儀口町235-2, 247-2 050419	老人住宅 (個人)	3mf	遺構・遺物なし	
	2	32 4-A-6	田原口城跡 (第2次)	儀口町841 050919～ 051207	050919～ 051207	防災設備の建設 (宗教法人法華宗)	170mf	年賀市文化財調査 報告書第22集所取	
	3	31 4-A-5	儀口北窓跡	儀口町242-23 060202	060202	宅地造成・分譲住宅 (株式会社岡島ハウジング)	5mf	遺構・遺物なし	
	4	5 1-B-5	高山城跡 (第1次)	高山町4756-2 041129～ 041203	041129～ 041203	施設の建設 (生駒市長中本一)	10mf	郡や郷聚が存在	

第1表 2002年度～2005年度 実施発掘調査

II 位置と環境

1 地理的環境 [第1図]

生駒市は、奈良県の北西の端に、その名がしめすとおり生駒山地の東側に位置している。東西7.8km、南北14.9kmと南北に細長く、西は大阪府、北東は京都府、東は奈良市と大和郡山市、南は平群町、斑鳩町に接する。

地形的には、主峰生駒山（642m）を中心とした山地の東斜面と、矢田丘陵から西の京丘陵にはさまれた山間部にある。西山中と称されることもある。そうしたなかで、複数の河川によるわずかな谷底平野がみられ、平野部ごとに地域を細分することが可能である。

北部から北東部にかけては、富雄川水系の谷底平野と丘陵部が広がっている。

北西部から南部の地域は、生駒山地と矢田丘陵にはさまれた盆地状の地域である。天野川水系と竜田川水系にわかれています。南北二つの谷底平野が接するような関係にある。

北西部は、天野川水系の谷底平野である。川の東側の平野を生駒市、西側を四条畷市と、川により大阪府との境界をなしている。

中央部から南部は、竜田川による平野を形成している。東西の幅が数百mと比較的に広い場所もあり、市内では比較的平坦な地域が広がっている。

2 歴史的環境 [第2図]

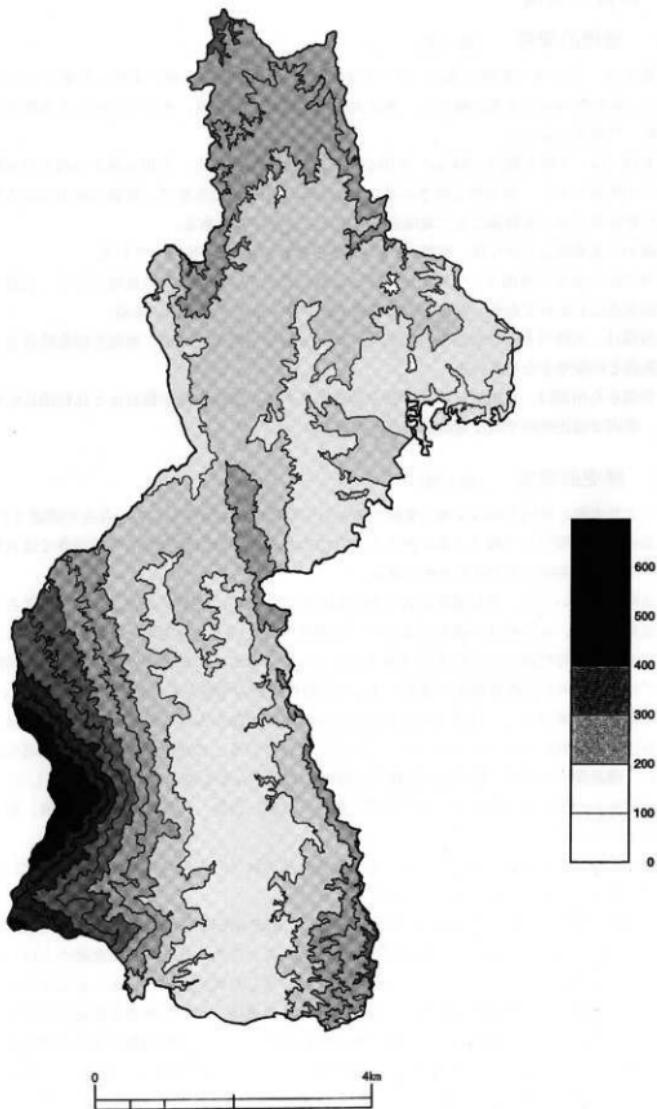
古くより大和と河内を結ぶ交通の要衝であった生駒は、縄文時代から人の存在が確認されている。市南部の小平尾町付近で縄文土器が出土したといわれ、南田原町地内での発掘調査では石器が出土している。その実態はまだ不明である。

弥生時代については、萩原遺跡が古くから知られていたが、90年代の奈良県立橿原考古学研究所の発掘調査から、弥生時代の遺構があいついで発見されている。中業畑・一水口遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初頭の住居域を区画するとみられる溝が、西畠遺跡では、中期の住居跡が確認されている。2001年の萩原遺跡の調査では、弥生時代中期の水路とみられる溝を検出している。

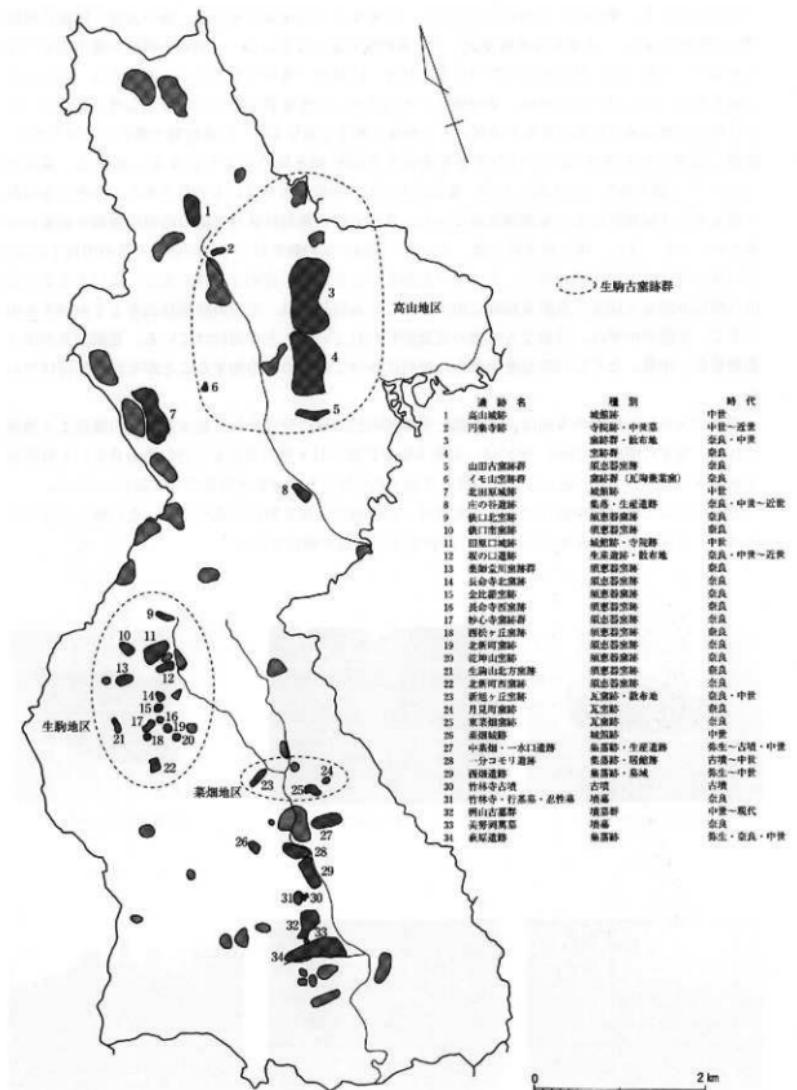
古墳時代の遺跡として、竹林寺古墳や竜田川の流域の遺跡があげられる。竹林寺古墳は、前期の前方後円墳で当初の全長は60m程度あったと考えられている。1939年に後円部の主体部の調査が実施され、擾乱後であるが、特異な内部構造を持つことが明らかとなっている。遺物として、「長宜子孫」の銘をもつ内行花文鏡をはじめ、石飼、鉄刀、鉄剣、鉄釘、円筒埴輪、家形埴輪、蓋形埴輪などが出土している。

また、一分コモリ遺跡では居館にめぐる大溝が確認されている。西畠遺跡は弥生時代に引き続き集落が存在し、土坑からは大量の土器が出土している。

奈良時代になると、生駒は須恵器生産の拠点として市内各所に窯が営まれる。その数は不明だが、市域の中部から北部にかけての地域で相当の数あったことであろう。金比羅窯跡からは「宮」と線刻された杯蓋が出土している。上町の庄の谷遺跡はそうした須恵器生産にかかわる工人の集落であろう。西畠遺跡では大型建物跡が検出されており、この地域を治める拠点と想定されている。萩原では明治5年に開墾中に銅板墓誌が発見され、奈良時代の官人の美努岡萬の墓所が明らかとなっている。また行基は、『行基年譜』によると、慶雲4（707）年に「生馬仙房」を建立し、和銅7（714）年までここで修行を続けた。行基はここを拠点に新都平城京での布教をはじめたのである。この仙房は、有里の竹林寺をさすとされ、境内には行基の墓所がある。生駒は平城京からも近く、人々



第1図 地形図



第2図 主要遺跡分布図

の活動も平城京と密接に関係していた。

中世に入ると、鷹山庄・上鳥見庄・生馬庄・田原庄などの荘園が成立し、他の大和と同様に興福寺の支配がおよぶ。『大乗院寺社雜事記』や『多門院日記』などには、一乗院の衆徒の鷹山氏や「生馬両載人」と称された荘官達がたびたび姿を見せ、活動の一端をうかがうことができる。こうした在地勢力は、高山城や北田原城、菜畠城など市内各所に中世城郭を築いている。文暦2(1235)年に竹林寺の僧寂滅が行基の墓所を発掘し、舍利瓶と墓誌を発見する。行基信仰が盛んになるなかで、寂尊、忍性らは行基をならい社会事業を進め人々の信仰を集めようになる。忍性は、嘉元元(1303)年に鎌倉極楽寺で入寂したが、遺命により行基の眠る竹林寺にも分骨された。墓所は奈良県立橿原考古学研究所による発掘調査がなされ、花崗岩製八角形柱状外容器の内部に銅製骨蔵器が安置されていた。また、興山往生院には、正元元(1259)年の銘を持つ宝篋印塔、有里の円福寺には2基の鎌倉時代の宝篋印塔が残り、かつての信仰をうかがわせる貴重な遺物である。長弓寺本堂、高山八幡宮本殿など国宝・重要文化財に指定されている建造物は、中世の建築様式をよくの残るものである。生駒の中世は、活発な人と物の交流が行われていたことを裏付けている。発掘調査の出土遺物量が、中世、とくに13世紀後半から14世紀にかけてのものが増加することがそれを裏付ける。

近世に入り江戸時代の生駒は、添下郡と平群郡の22の村に分けられ、旗本領と郡山藩領より構成される。幕末の慶応4(1868)年には、旧旗本松平氏領の11ヶ村の領民が辻村にある代官の矢野陣屋を取り囲むという事件が起こる。その際に作成された村ごとの傘形連判状が今に伝わっている。

近代になると町村制の施行により、北後村、北生駒村、南生駒村が成立する。その後、合併をくり返し、現在の市域を有するにいたり、昭和46年に市制が施行される。



萩原遺跡出土石包丁



竹林寺古墳



金比羅窯跡出土杯蓋



美努岡萬墓



行基墓



興山往生院 宝篋印塔

III 中菜畑・一水口遺跡第8次調査

1 調査の経過

生駒市中菜畑二丁目1073-3ほか16筆でスーパーの建設が計画された。当地は、中菜畑・一水口遺跡の中央部に位置している。開発総面積は約6,800m²、店舗の建築面積は約3,000m²という生駒市内では大きな発掘現場であった。市教委では事業者と協議を行い平成15年5月12日から試掘確認調査を実施することとなった。試掘確認調査を行った結果、上層と下層の2層の遺構面があることが判明した。とくに下層遺構は、弥生時代後期から古墳時代の遺構を検出した。一水口遺跡では最も古い時代のものであり、新規発見の遺構であった。この結果を受けて、市教委では再度事業者と協議を行い、調査区を拡大して発掘調査を行うこととなった。7月31日から調査を行い、10月24日まで埋め戻しを行ったのち現場を事業者に引き渡し現地調査を終了した。総調査面積は約1,500m²であった。

2 位置と環境 [第3・4図]

生駒市の中央部から南部の地域は、竜田川による生駒谷と呼ばれる平野を形成している。市内では比較的平坦な地域が広がっており、調査地もその平野の一角に位置している。

調査地付近では、竜田川の流路が、調査地の北約200mで大きく南西方向に蛇行した後、南東方向にその流路を戻していく。調査地は、南北を蛇行した竜田川の流路にはさまれた氾濫原に位置している。調査地の現地表の標高は、北端で118.3m、南端は118.0mである。



第3図 調査地周辺遺跡分布図

竜田川の流域に沿ったこの地域、とくに調査地周辺は、一分遺跡群と称される市内でも有数の遺跡地帯で、南北約1kmにわたって弥生時代から中世にかけての遺跡がひろがっている。中葉畠・一水口遺跡は竜田川をはさんで北側を中葉畠遺跡、調査地がある南側を一水口遺跡に分けられる。中葉畠遺跡では弥生時代後期から古墳時代にかけての3条の溝を検出している。今回調査の隣接地の一水口遺跡第一次調査地では、水路や貯水施設など水利に関連する中世の遺構を検出している。

また、調査地の南西には延喜式内社の往馬大社が鎮座している。境内整備とともに発掘調査では大量の中世土器とともに古墳時代の須恵器も出土している。

このように、竜田川の流域は古くから人々の活動が活発に行われてきた地域である。

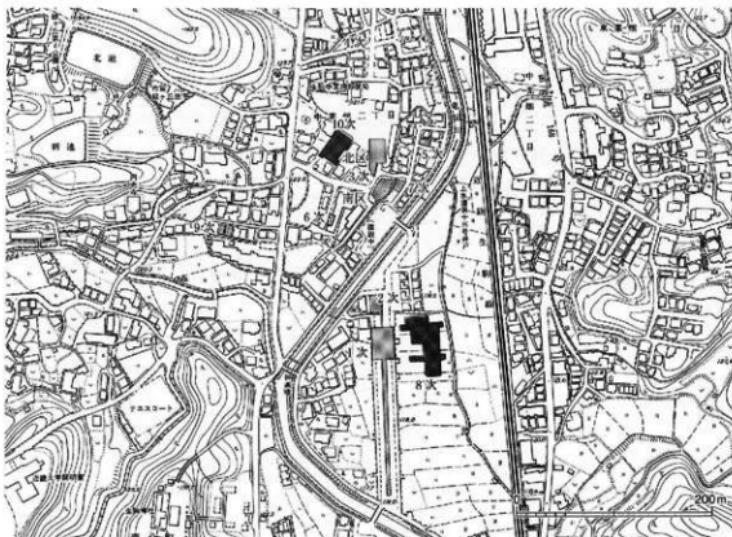
3 遺跡の調査

(1) 調査区と層序 【第5・6図】

試掘確認調査で、店舗の建築部分に南北に1本、東西に2本のトレンチを設けた。本調査では、遺構のひろがりが予想される部分を拡張して調査区を設けた。

基本層序は、黒褐色砂質土（耕作土）、灰白色砂質土（耕作土）、橙色極細粒砂（床土）、褐灰色極細粒砂層（中世耕作層）、褐灰色極細粒砂層（上層遺構検出面）、明黄褐色極細粒砂層から明緑灰色極細粒砂層（沖積層、下層遺構検出面）である。

調査区の内の中央部から南部にかけては、灰黄色細粒砂～中粒砂層が下層遺構検出面の直上におよそ5～10cm程度堆積している。この砂層は洪水により堆積したものと見られ、調査区内の遺構



第4図 調査地位置図

面を削っている可能性もある。この砂層からは古式土師器が出土している。

洪水堆積層の上層部も中世の耕作層の造成の際に削平を受けていると考えられる。

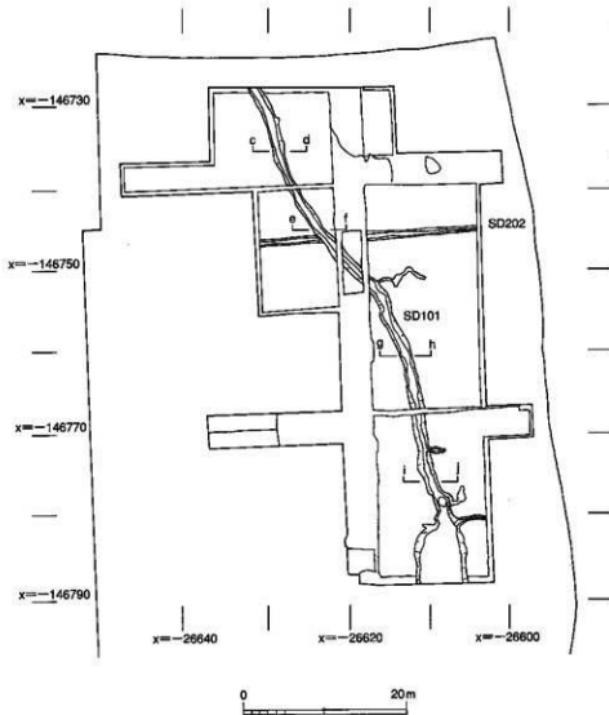
(2) 造構 〔第5・6・7図〕

下層造構

溝1 (SD101)

検出幅1.4~1.5m、検出面からの深さ約25~50cm、断面形状は底部に向けては緩やかに下り底部は丸い。底面のレベルは、北端で117.6m、南端で117.0m、北から南に向けて流れている。造構は、調査区北端からやや東へ蛇行しながら調査区の南端まで続く。

調査地は竜田川の氾濫原のなかに位置し、造構検出面は沖積層の砂地で、荒い砂礫層が堆積している場所があった。こうしたなかで、溝は地盤が荒い砂礫層の場所を避け、比較的砂の粒子が細か



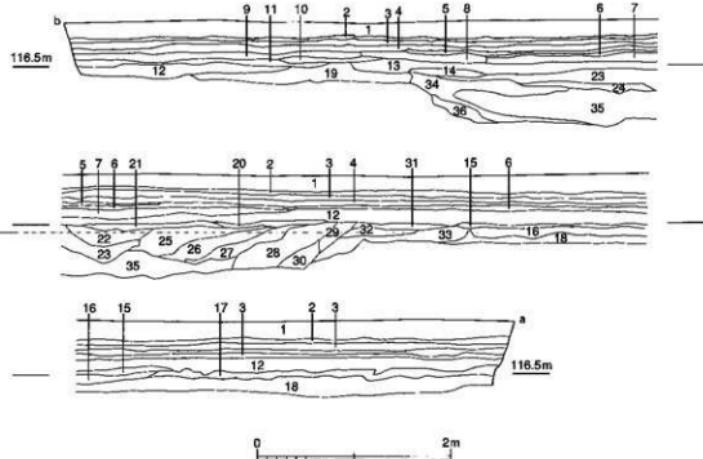
第5図 調査区平面図

く、地盤が固いところを選んで掘削されている。そのため、溝は真南に直進せず、やや東に進路を曲げながら南に向けて掘削されたとみられる。溝の存続時期は、遺物の年代からTK47型式頃には機能し、TK10型式頃に埋没し廃絶したとみられる。

溝の堆積物は、2～3mm程度の比較的粗い砂層が底部を中心に埋めており、古式土師器や弥生土器の小片も出土した。流水がある状態で溝が機能していたと考えられ、遺物量は少ない。

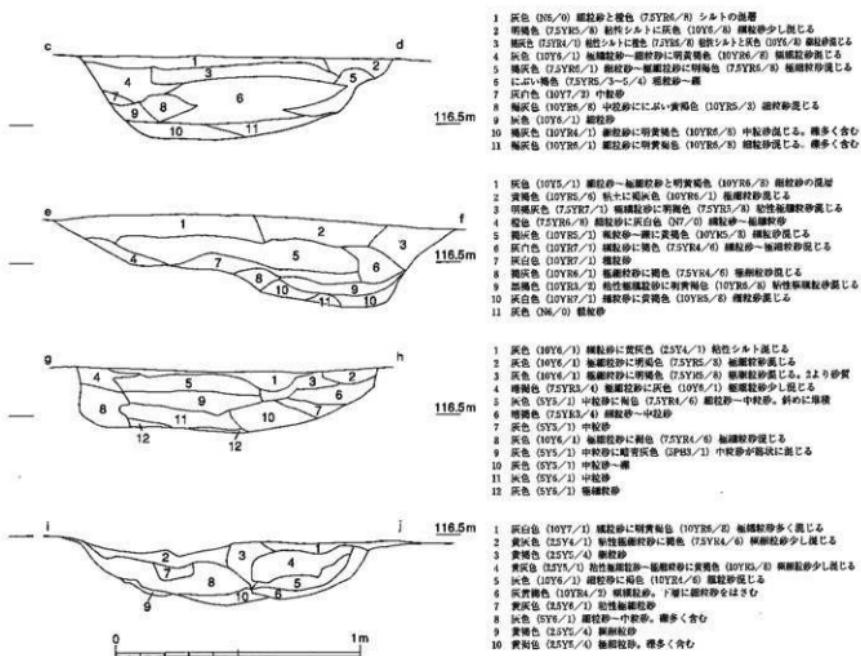
調査区の最南部では、時期により溝の流路に変遷がみられる。掘削当初、幅が約5.6mあった。その後、砂の堆積によりしだいに溝幅がせばまり、埋没していく様子がうかがえる。

この溝の用途については不明である。農業用の水路の可能性が高いと考えられるが、溝の周辺に水田の畦の痕跡が残されていないか探ったものの検出することはできなかった。洪水の際に畦を削



- 1 黒褐色 (25Y3/1) 砂質土
 2 黄褐色 (25Y7/1) 穗状土
 3 淡色 (25Y6/1) 稲穀粒砂・灰白色 (10Y7/1) 稲穀粒砂混じる
 4 灰褐色 (10Y6/1) 稲穀粒砂・根鉢砂に混じる (0.5Y6/1) 稲穀粒砂混じる
 5 灰褐色 (10Y6/1) 稲穀粒砂に混じる (10Y4/1) 稲穀粒砂混じる
 6 黄褐色 (25Y5/1) 稲穀粒砂に灰白色 (10Y2/1) 稲穀粒砂混じる
 7 黄褐色 (10Y2/1) 稲穀粒砂・根鉢砂に混じる (0.5Y5/1) 稲穀粒砂混じる
 8 黄褐色 (10Y6/1) 稲穀粒砂に黄褐色 (25Y5/1) 稲穀粒砂混じる
 9 灰褐色 (10Y6/1) 稲穀粒砂・根鉢砂に混じる (25Y5/1) 稲穀粒砂混じる
 10 黄褐色 (10Y2/1) 稲穀粒砂・根鉢砂に黄褐色 (10Y5/1) 稲穀粒砂混じる
 11 黄褐色 (10Y7/1) 稲穀粒砂・根鉢砂に黄褐色 (10Y5/1) 稲穀粒砂・根鉢砂混じる
 12 黄褐色 (10Y7/1) 稲穀粒砂に黄褐色 (10Y2/1) 稲穀粒砂・根鉢砂
 (10Y4/1) 稲穀粒砂の上層
 13 灰褐色 (25Y6/1) 稲穀粒砂・中粒砂に黄褐色 (10Y5/1) 稲穀粒砂混じる
 14 黄褐色 (25Y5/1) 稲穀粒砂・中粒砂に黄褐色 (10Y5/1) 稲穀粒砂混じる
 15 黄褐色 (25Y7/1) 稲穀粒砂に混じる (25Y4/1) 稲穀粒砂混じる
 16 明黄色 (75Y5/1) 稲穀粒砂・根鉢砂に灰褐色 (5Y6/1) 稲穀粒砂混じる
 17 黄褐色 (25Y4/1) 稲穀粒砂・根鉢砂に明黄色 (75Y5/1) 稲穀粒砂と明黄色
 (10Y5/1) 稲穀粒砂少し混じる。マンガん含む
 18 灰色 (75Y6/1) 稲穀粒砂に明黄色 (10Y7/1) 稲穀粒砂・根鉢砂混じる
 19 灰色 (10Y6/1) 稲穀粒砂に明黄色 (10Y5/1) 稲穀粒砂・根鉢砂がまだらに混じる
 20 黄褐色 (25Y5/1) 稲穀粒砂に灰褐色 (10Y6/1) 稲穀粒砂混じる
 21 黄褐色 (10Y7/1) 稲穀粒砂に黄褐色 (10Y5/1) 稲穀粒砂まだらに混じる
 22 黄褐色 (10Y5/1) 稲穀粒砂・根鉢砂に明褐色 (7.5Y5/1) 稲穀粒砂まだらに混じる
 23 黄褐色 (25Y4/1) 稲穀粒砂に明褐色 (7.5Y5/1) 稲穀粒砂まだらに混じる
 24 黄褐色 (10Y7/1) 稲穀粒砂に明褐色 (7.5Y5/1) 稲穀粒砂まだらに混じる
 25 黄褐色 (10Y6/1) 稲穀粒砂に明褐色 (7.5Y5/1) 稲穀粒砂まだらに混じる
 26 黄褐色 (10Y5/1) 稲穀粒砂に明褐色 (7.5Y5/1) 稲穀粒砂まだらに混じる
 27 黄褐色 (10Y5/1) 稲穀粒砂に明褐色 (7.5Y5/1) 稲穀粒砂まだらに混じる
 28 黄褐色 (25Y4/1) 稲穀粒砂に明褐色 (7.5Y5/1) 稲穀粒砂まだらに混じる
 29 黄褐色 (5Y6/1) 稲穀粒砂に黄褐色 (10Y5/1) 稲穀粒砂混じる
 30 黄褐色 (10Y7/1) 稲穀粒砂に明褐色 (7.5Y5/1) 稲穀粒砂まだらに混じる
 31 黄褐色 (10Y7/1) 稲穀粒砂に黄褐色 (10Y5/1) 稲穀粒砂混じる
 32 黄褐色 (10Y5/1) 根鉢砂・根鉢砂に黄褐色 (10Y5/1) 稲穀粒砂混じる
 33 黄褐色 (10Y6/1) 稲穀粒砂に黄褐色 (10Y5/1) 稲穀粒砂・新性根鉢砂まだらに混じる
 34 黄褐色 (10Y6/1) シルトに明褐色 (75Y5/1) 稲穀粒砂まだらに混じる
 35 黄褐色 (25Y4/1) 中粒砂・細粒砂、灰白色 (5Y7/1) 稲穀粒砂、明黄色
 (25Y5/1) 稲穀粒砂、明褐色 (5Y7/1) 稲穀粒砂、黄褐色 (10Y6/1) 中粒
 砂・細粒砂が併せて埋積
 36 黄褐色 (10Y6/1) 部粒砂に明褐色 (10Y5/1) 稲穀粒砂少し混じる

第6図 調査区南壁土層図



第7図 溝1 (SD101) 土層図

られてしまった可能性もあるが、溝の周辺は砂地のため保水性の面で稻作には適さなかったとも考えられる。今後、周辺の調査の際の課題としておきたい。

上層遺構

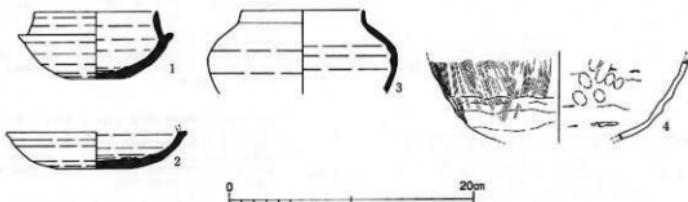
溝2 (SD202)

検出幅50~100cm、検出面からの深さは12~15cmの区画溝。底部は丸い。埋土からは、石鎚、14世紀頃までの土師器、須恵器、瓦器などが出土している。現在の田の区画と並行しており、中世にはおおむね現代のような耕作地となっていたと考えられる。

(3) 遺物 [第8図]

弥生時代から中・近世までの石器、土器等が出土した。図化したものは、溝1 (SD101) から出土したものである。

- 1は須恵器の杯身。外面は、底部から2/3が回転ヘラ削り調整、上部1/3はヨコナデ調整されている。蓋受け部は短く、端部は丸い。たちあがり端部に沈線状にわずかな段がある。TK47型式。
- 2は須恵器の杯身の体部。たちあがり部が欠損している。底部外面は、下部の1/2が回転ヘラ削り調整、上部はヨコナデ調整されている。TK10型式と1に比べ新しい。
- 3は須恵器の短頸壺。口頸部は短く直立する。体部はカキ目調整されている。
- 4は土師器の壺。体部の下部の一部。粘土紐接合痕が残る。外面はハケメ調整され、内面には指頭圧痕が明瞭に残る。



第8図 出土遺物実測図

4まとめ

今回の調査では、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物を確認することができた。特に、新たに下層で古墳時代の遺構を確認することができたことは、たいへん興味深いものである。

調査地は、竜田川の氾濫原、しかも南北を竜田川にはさまれ、川の氾濫のたびに冠水するであろう低地に位置している。竜田川流域の土地利用において、このような氾濫原は、中世以降に耕地化するものと考えてきた。今回の調査の結果から、氾濫原においても古代から土地利用が進んでいたことが明らかとなった。生駒谷では平地が少なく、貴重な平地を積極的に利用しようとしてきたものと考えられる。

今回の調査で得られた成果は、生駒谷の景観変遷史、土地利用の変遷を解明する貴重な資料となる。生駒の重要な遺跡地帯である一分遺跡群において、弥生時代から古墳時代を中心に、人々の活動の様子が見えてきつつある。今後の調査に期待がかかるところである。

IV 中葉畠・一水口遺跡第10次調査

1 調査の経過

中葉畠二丁目1129-1で老人福祉施設の建築工事が計画された。

調査地周辺は、地表から比較的浅いところで遺構を検出することから、遺跡の状況を確認するための発掘調査を行うこととなった。

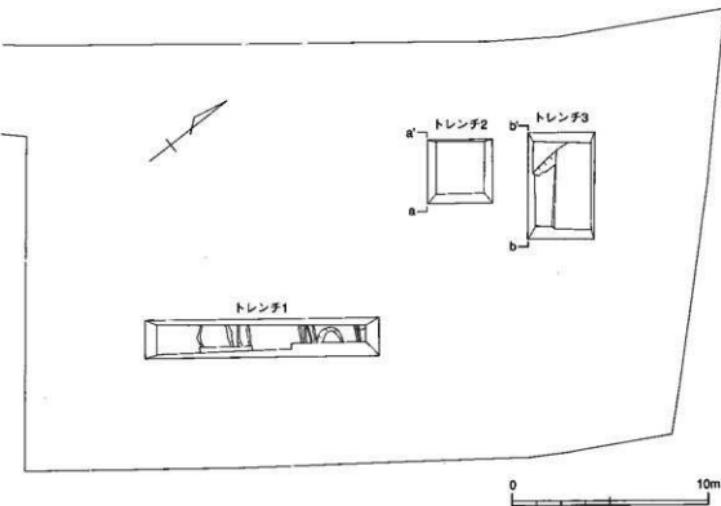
調査では建物基礎部分において2ヶ所のトレンチを設けた。その結果、建物基礎の掘削が盛土内にとどまり、遺跡が保護されることが判明した。遺跡が破壊される浄化槽埋設部分にもう一つトレンチを設け、合計3つのトレンチで調査を行った。

現地での発掘調査は、2004年12月15日から12月21日まで、調査面積約53m²で実施した。

2 位置と環境 〔第3・4図〕

調査地は生駒谷のほぼ中央部に位置している。調査地周辺は、緩やかに南に下がる平坦な場所であり、北西側からは大きな尾根が延びてくる。

調査地周辺は、竜田川に沿って南北約1kmにわたって毫分遺跡群と称される遺跡地帯がひろがっている。弥生時代から中世にいたる複合遺跡である。調査地はその最北の中葉畠・一水口遺跡の一角に位置する。調査地の東側では奈良県立橿原考古学研究所による第3次調査が行われている。この調査で、河岸段丘があることが判明し、弥生時代後期から古墳時代の排水用と見られる溝群など



第9図 調査区配置図

を検出している。一分コモリ遺跡では古墳時代の豪族の居館にめぐる漆などを検出している。西畠遺跡では弥生時代、古墳時代の集落や奈良時代の大型建物などが存在した。このように市内でも有数の遺跡地帯である。

3 遺跡の調査

(1) 調査区と層序 [第9・10・11図]

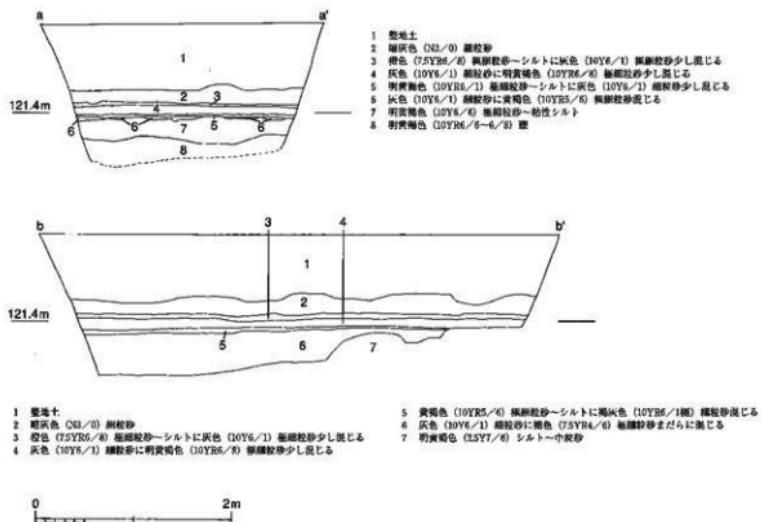
調査地内に3ヶ所のトレンチを設けた。トレンチ1は、調査区東側に幅2m、長さ12m。南側の一部を近年の開発事業で破壊されていた。トレンチ2は、調査区北西側に3.3m四方。トレンチ3は、トレンチ2北側の浄化槽埋設部に設けた。5.6m、3.5mで南側半分のみ地山まで掘削を行った。

基本層序は、整地土、暗灰色細粒砂層（耕作土）、橙色細粒砂層（床土）、灰色細粒砂層（中世耕作土）、明黄褐色粘性シルト層（地山）にいたる。明黄褐色粘性シルト層の上面で遺構を検出した。遺構検出面はトレンチ1では標高約121.3m、トレンチ2では約121.4mである。

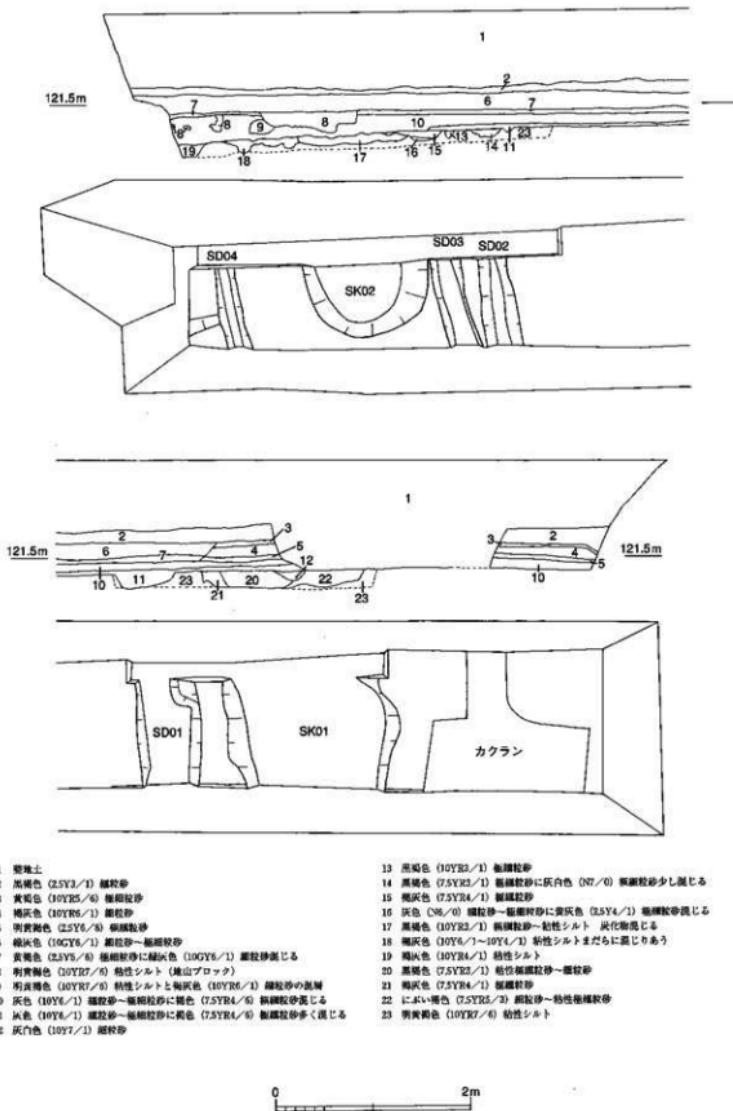
(2) 遺構 [第9・11図]

土坑1 (SK01)

トレンチ1の南側で検出した。検出幅1.4～1.8m、深さ18cm。底部は平ら。中央部でまとまって壺、高杯などの土器が、北側で須恵器の杯が出土した。出土遺物から古墳時代前期後半の遺構である。



第10図 トレンチ2・3 土層図



第11図 トレンチ 1 造構平面・土層図

土坑2（SK02）

トレント1の北部で検出した。検出幅1.3mの円形。深さ10cm前後。埋土からは土師器や瓦器が出士した。

溝1～溝4（SD01～SD04）

トレント1で検出した。SD01は中世のもの。他の溝の時期は不明である。

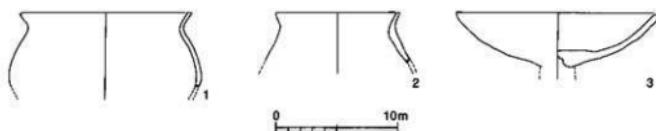
谷地形

トレント3で検出した。北西から南東方向に向かって落ち込んでいく。この谷は、中世に人工的に土を入れ、意識的に埋め立てられている。調査地北側には隣接地との間に擁壁があり、現在でも約1～1.5mの落差がある。検出した谷は、この落差に先行する地形である。また、第3次調査の北区で検出した段丘崖につながっていく地形と考えられる。調査地のさらに北西方向からは尾根と谷筋がのびている。調査地の北側には、北西方向から南東方向にのびる谷筋の存在が想定される。

（3）出土遺物〔第12図〕

図化できたものは土坑1（SK01）出土のものである。土坑1（SK01）からは土師器が多く出土したが、接合復元、図化できたものは少なかった。また図化できたものも土器の内外面とも風化が進んでおり調整は不明。

1と2は小型丸底壺。いずれも口縁部は短い。3は高杯の杯部。湾曲して口縁が広がる杯部をもつ。いずれも4世紀後半の古墳時代前期後半のもの。



第12図 出土遺物実測図

4まとめ

中葉畠・一水口遺跡周辺では、竜田川の河岸段丘や谷地形が存在し、現在の地形より起伏に富んでいた。竜田川より一段高い段丘上には、弥生時代から古墳時代にかけての集落が営まれていたことが明らかとなった。竜田川に沿って存在する一分コモリ遺跡や西畠遺跡も同時期の遺跡である。これら3つの遺跡は互いに密接に関係する遺跡であり、生駒谷の弥生から古墳時代を解明するうえで貴重な遺跡である。

中世の後期になると谷筋や河岸段丘の下段などの低地でも耕作地化されていく。その過程では、段丘面を削り、谷を埋めて造成していく人々の営みがうかがえる。

今後の調査では、弥生時代から古墳時代の集落の様相がさらに解明されることが期待される。

V 田原口城跡第7次調査

1 調査の経過

俵口町919-1、920-1で、宅地造成、分譲住宅の建設工事にともない発掘調査を実施した。調査は、道路設置部分を中心に行なうことで施主と合意し、2005年1月19日に遺跡の存否を判断する試掘調査を実施した。その結果、遺物包含層を検出した。これを受け、1月27日から28日まで約28m²で発掘調査を実施した。

2 位置と環境 〔第13・14図〕

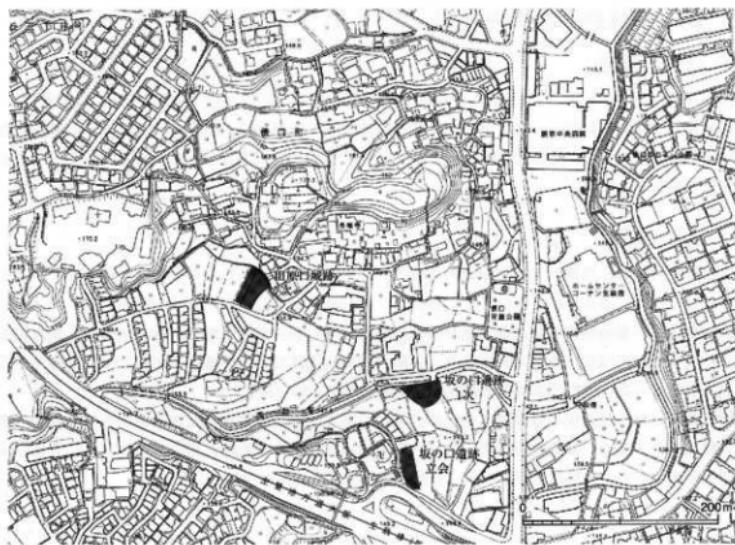
俵口町付近では、西側から生駒山地の山裾の谷筋が多くのびる。それらが集まり小さな平坦部を作りだしている。調査地も緩やかに東に向かって下る場所にあり、かつては田畠がひろがっていた。

俵口付近は、奈良時代の須恵器の窯が多数確認されている。生駒山地の山裾を利用し、窯が営まれ、その製品は平城京へ出荷されていた。近隣の坂の口遺跡でも尾根筋を利用した窯跡が存在すると想定されている。俵口は生駒古窯跡群の生駒地区の中心部である。

鎌倉時代には、長福寺本堂が建立される。境内で実施した発掘調査では中世末から近世初頭の遺構を検出した。また、調査地付近の一帯は、田原口城跡として遺跡地に指定されている。長福寺本堂北側の裏山がその主郭部と想定され、複数の郭状の平坦面が存在している。



第13図 調査地周辺遺跡分布図



第14図 調査地位置図



第15図 調査区配図

3 遺跡の調査

(1) 調査区と層序 【第15図】

道路設置部に2ヶ所のトレンチを設けた。トレンチ1は約3.5m、約5mで調査地の中心に設けた。トレンチ2は、約4.8m、約2.1mで調査地南側に設けた。

層序は、黒褐色極細粒砂（耕作土）、緑灰色細粒砂（耕作土）、黄色～黄橙色粘性極細粒砂（床土）、黄灰色細粒砂～中粒砂（遺物包含層）、明黄褐色～明赤褐色中粒砂（地山）にいたる。

トレンチ1では、地山層の上面で、西方向から東方向に向かってなだらかに下っていく地形を検出したが、顕著な遺構はなかった。トレンチ2では、約30cmの遺物包含層が堆積する。この層からは中世の遺物を中心に、弥生時代から奈良時代にかけての遺物が出土する。褐灰色中粒砂～小砾層の上面で砂礫にはさまるようにサスカイト片が出土した。

(2) 遺物 【第16図】

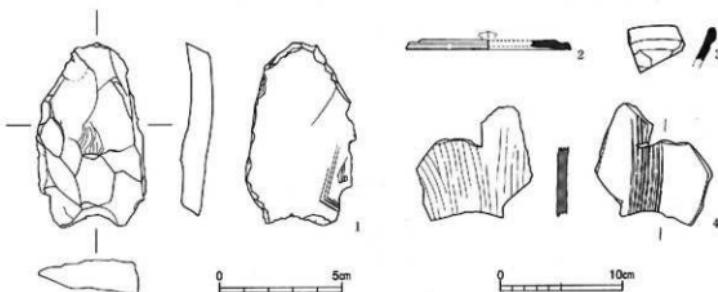
図化したものはトレンチ2の黄灰色細粒砂～中粒砂の遺物包含層から出土したものである。

1は石核。片面のみに打面が明瞭に残る。

2は須恵器の杯蓋。奈良時代後半のもの。

3は白磁の椀の口縁端部。14世紀頃のもの。

4は瓦質摺鉢。外面はハケメ調整。内面は10条の擦目がある。16世紀後半のもの。



第16図 出土遺物実測図

4 まとめ

今回の調査では、城郭に直接関係する遺構を検出することはできなかった。調査地は、南北を小高い丘にはさまれた幅約100mの谷筋にあたる。中世後期段階でこの谷筋を、西側方向の上流部から土砂が流れ込んでいるものとみられる。

今回の調査で注目されるのは、サスカイト片が多く出土したことである。現在のところ調査地付近では弥生時代の遺跡は確認されていないが、調査地付近に弥生時代の遺跡が存在することが予想される。今後の調査の際には、留意する必要がある。

VI 坂の口遺跡第1次調査

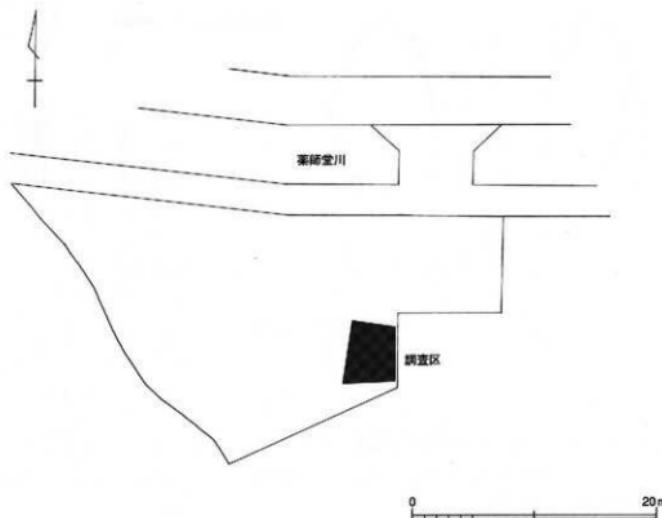
1 調査の経過

俵町1069-1、1070、1071-1で老人福祉施設の建設にともない埋蔵文化財発掘の届出が提出された。設計内容では建築物の基礎が遺跡を破壊する可能性があり、事業者と遺跡保存の協議を行った。その結果、設計変更により遺跡の保存措置が図られたため、浄化槽埋設部について発掘調査を行うこととなった。現地調査は2002年10月7日から10日まで、調査面積の約20m²で実施した。

2 位置と環境 [第13・14図]

生駒谷の北部に俵町は位置している。西側から生駒山地の山裾の谷筋が多くのび、それらが集まり小さな平坦部を作りだしている。調査地も緩やかに東に向かって下る平坦な場所にある。薬師堂川右岸の標高142mに位置し、着手前は田であった。

調査地周辺は複数の遺跡が分布する。調査地より山手の生駒山地中腹からすそ野にかけては、須恵器の窯跡が多く分布している。俵町付近は、奈良時代後期の一大窯業地帯で、平城京へと供給されていた。調査地の北へ約180mの地点には中世山城の田原口城跡と鎌倉時代の本堂を持つ長福寺がある。長福寺境内で2005年に実施した発掘調査では、中世末期から近世初期の遺構を検出していいる。



第17図 調査区配置図

3 遺跡の調査

(1) 調査区と層序 [第17・18図]

浄化槽埋設部に南北4.5m、東西3.5mの調査区を設けた。

基本層序は、整地土、黄橙色砂質土（床土）、黄灰色砂質土、明黃褐色砂質土（上層遺構検出層）、褐灰色砂質層、黄灰色砂質層、灰オリーブ色細粒砂（中層遺構検出層）、灰色細粒砂層（下層遺構検出層）にいたる。3層の遺構面を確認した。

(2) 遺構

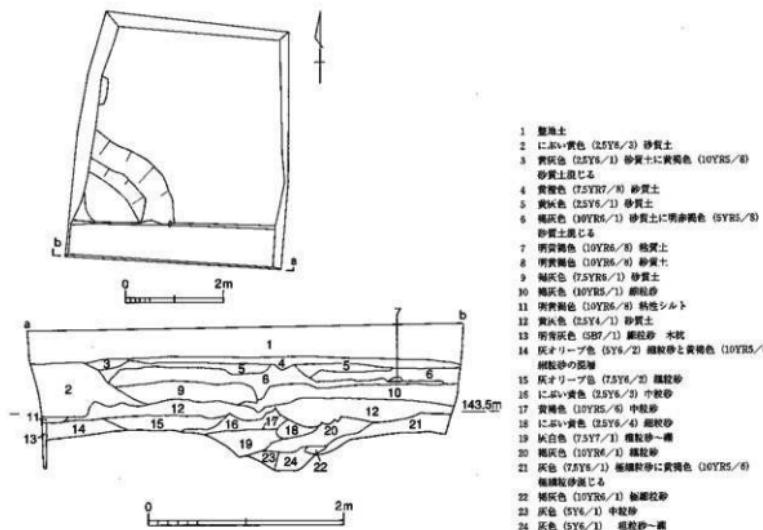
流路 [第18図]

下層検出遺構。調査区の南西の端で流路を検出した。流れの向きは北西方向から南東方向である。埋土は、直径20cm程度の石から極細砂の互層である。石や砂礫に混じって須恵器と若干の土師器が出土した。須恵器は、流水による摩滅は見られず、接合できるものもあった。器種は、杯A、杯B、杯蓋、甕、壺など、年代は奈良時代後期のものである。市内の窯跡出土の器種構成と類似しており、年代もほとんど時期差はないものとみられる。

耕作遺構

上層と中層の遺構検出面で素掘溝を検出した。

上層では、検出幅約10~40cm、深さ10cm前後、底部は平らで不規則にならぶ素掘溝である。溝に並行して牛の足跡と人の足跡を確認した。溝埋土からは、須恵器・土師器の小片が出土した。

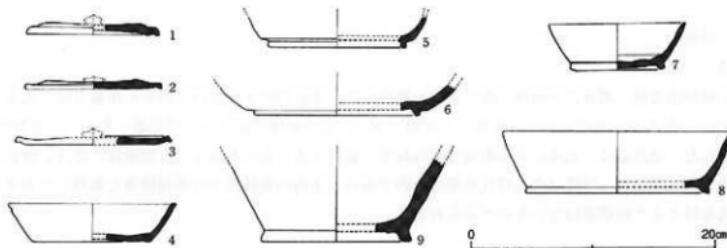


第18図 調査区 平面・土層図

中層では、4条の素掘溝を検出した。埋土からは須恵器・土師器の小片などが出土した。

(3) 遺物 〔第19図〕

大半の遺物は流路から出土した。図化したものは流路から出土した須恵器である。器種は、1～3は杯蓋。4は杯A。5～8は杯B。9は壺の底部。いずれも8世紀後半のものである。生駒窯跡群出土の須恵器と同時期のものである。



第19図 出土遺物実測図

4 坂の口遺跡での立会調査

〔第14・20図〕

俵町1051-4の一部ほかで、住宅建設にともない浄化槽の埋設時に立会調査を実施した。調査地は、阿弥陀寺の東側に位置する。整地土（1.1～1.3m）、耕作土・床土（10cm）、褐灰色細粒砂（10cm）、青灰色～黄褐色シルトと堆積する。褐灰色細粒砂層には炭化物を含み、須恵器が出土した。この層は灰原の可能性がある。出土した須恵器は、杯A、杯B、杯蓋などである。



第20図 出土遺物実測図

5 まとめ

坂の口遺跡は中世・近世の遺物散布地とされているが、今回までの調査から、奈良時代の遺跡が存在することが明らかとなった。阿弥陀寺がある丘陵部の裾野付近に未発見の窯跡が存在する可能性が高い。また薬師堂川に沿った場所には須恵器生産の工房跡が存在する可能性もある。坂の口遺跡周辺には、工房跡など具体的な須恵器生産の実態を解明する手がかりが存在する可能性が高い。今後の調査に期すこととしたい。

図 版



中葉畠・一水口遺跡第8次調査地より暗峠方面を望む

図版 1 中菜畠・一水口遺跡第8次調査



1 着手前状況（南から）



2 遺構検出状況（北東から）

図版 2 中菜畠・一水口遺跡第8次調査



1 遺構掘削前状況（左が北）



2 遺構掘削後状況（南から）



1 溝1 (SD101) 掘削後状況（北から）



2 溝1 (SD101) 掘削後状況（南西から）

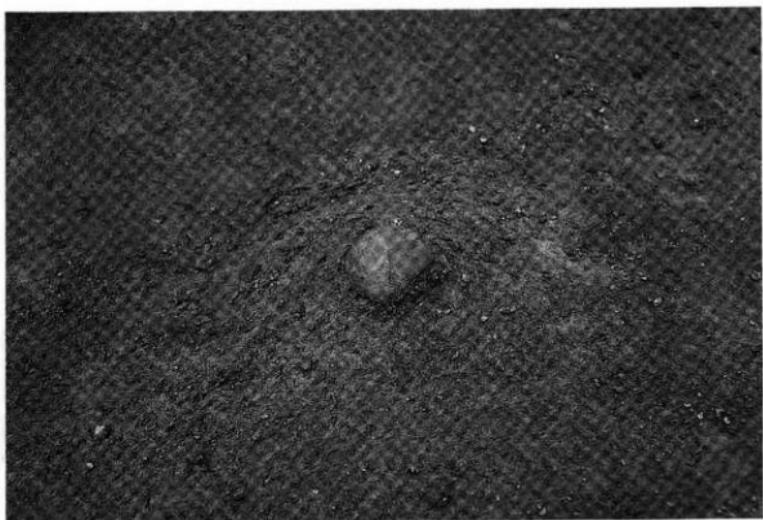
圖版 4
中菜烟・一水口遺跡第8次調查



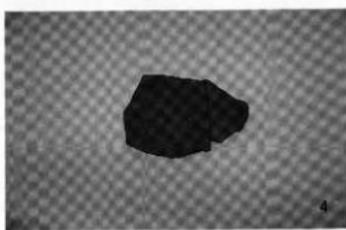
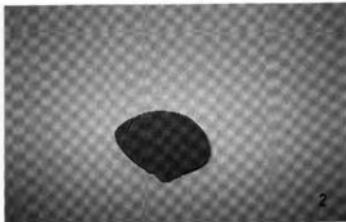
1 溝 1 (SD101) 堆積狀況



2 溝 1 (SD101) 堆積狀況



1 溝 1 (SD101) 遺物出土状況



2 出土遺物



1 着手前状況（南西から）



2 遺構検出状況（北東から）



1 遺構掘削後状況（北東から）



2 土坑1（SK01）掘削後状況（南東から）



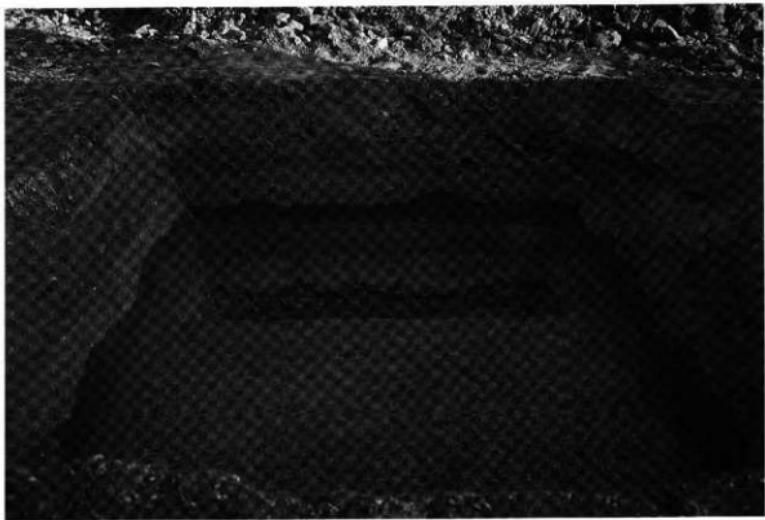
1 土坑1（SK01）遺物出土状況（南東から）



2 土坑1（SK01）遺物出土状況（南西から）



1 土坑 2 (SK02) 挖削後状況 (北東から)



2 トレンチ 2 挖削後状況 (北西から)



1 トレンチ3 挖削後状況（南東から）



2 出土遺物



1 着手前状況（西から）



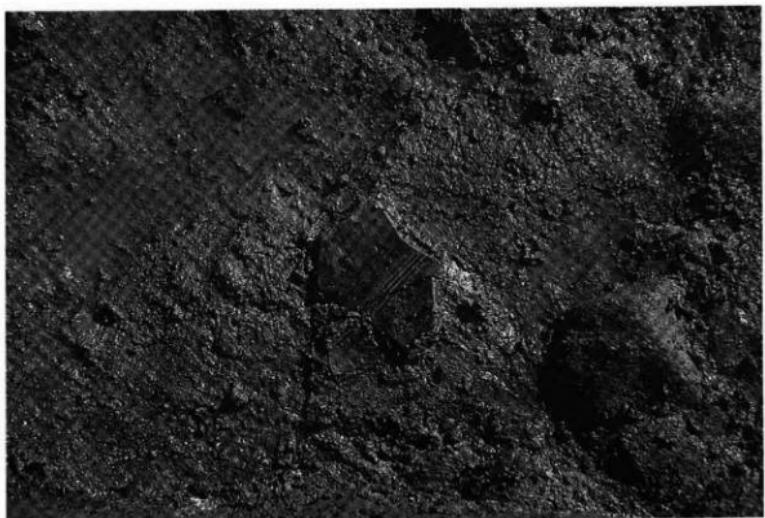
2 トレンチ1掘削後状況（西から）



1 トレンチ 1 北壁土層



2 トレンチ 2 東壁土層



1 トレンチ 2 遺物出土状況



1



2



3

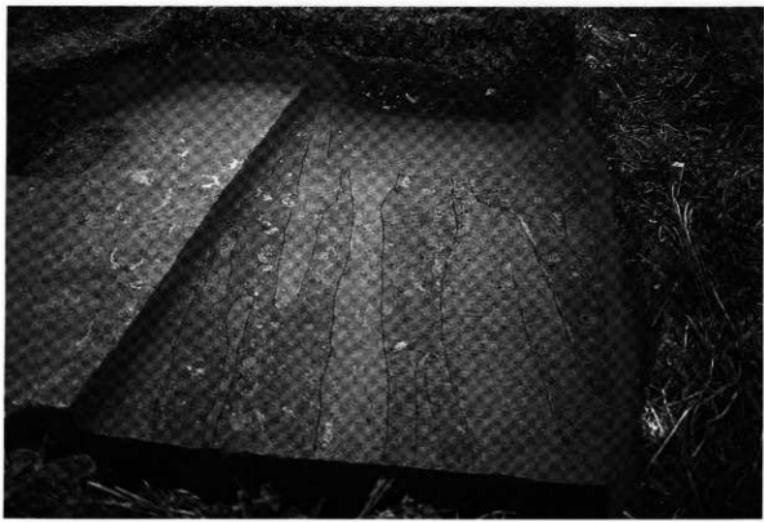


4

2 出土遺物



1 着手前状況（西から）



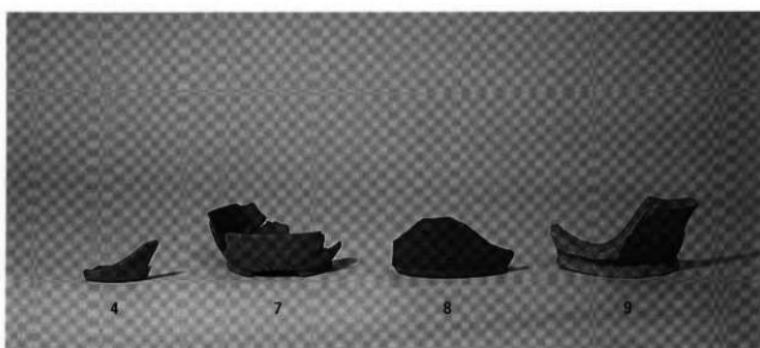
2 上層遺構検出状況（南から）



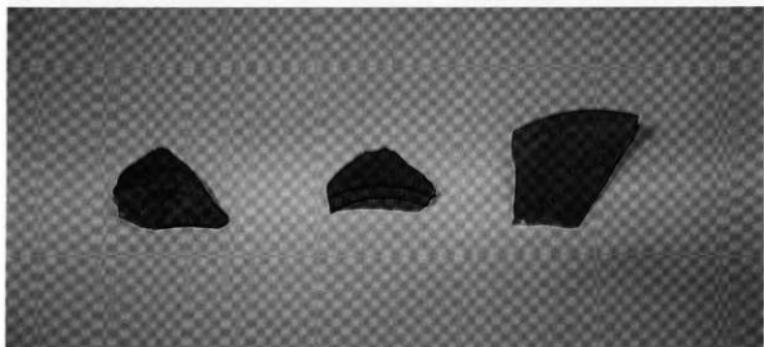
1 中層・下層遺構検出状況（南東から）



2 流路遺物出土状況



第1次調査出土遺物



立会調査出土遺物

あとがき

今回なんとか報告書を刊行するところまでこぎ着けることができました。

私が本市に勤めるようになってから市内での発掘調査件数は大幅に増加しました。少しづつではありますが、成果はあがってきていると確信しています。そうしたなかで、調査前、現地調査中、整理期間を通じて多くの方々にご指導ご協力をいただきました。感謝申し上げます。

発掘調査はまさにチームプレーです。現地調査では、重機のオペレーターさん、作業員さん、調査補助員、みなさんの協力なくしては成り立ちません。ひとたび雨が降ると調査区が水没しプールのようになってしまいます。そのたびにどこからか出現するザリガニ。こんなことに悩まされながら作業員さんたちのがんばりによりなんとか克服し、現地調査を見事に乗り切ってくれました。調査補助員たちも、暑い日も雨の日も生駒おろしが吹き荒れる日も私に振り回されながらもよく働き、よくがんばってくれました。整理作業でも調査補助員たちはよくがんばってくれました。底冷えのする作業場は、朝に出勤すれば氷点下。そこでの土器洗い、実測、トレースは過酷なものです。彼ら、彼女たちも、進学、就職、結婚、それぞれの活躍の場を見つけ、がんばっていると聞いています。みなさんのおかげで充実した調査を実施することができました。感謝。

私事ながら、中葉烟・一水口遺跡第8次調査の現場のさなかに子供が産まれ父親となりました。子供の成長は早く、月日の流れの速さを感じます。それに比べ、生駒の考古学的な歴史像の解明は遅々として進んでいません。私の力のなさを痛感すること々々です。今後とも地道な調査を積み重ねて、少しでもその成果を発信していきたいと考えています。さらなるご指導ご鞭撻をお願いいたします。



報告書抄録

ふりがな	いこましないいせきはくつちょうさがいようほうこくしょ 2005ねんど					
書名	生駒市内遺跡発掘調査概要報告書 2005年度					
副書名						
巻次						
シリーズ名	生駒市文化財調査報告書					
シリーズ番号	23					
編著者名	矢田直樹					
編集機関	生駒市教育委員会					
所在地	〒630-0288 奈良県生駒市東新町8番38号 TEL 0743-74-1111					
発行年月日	西暦 2006年 3月31日					
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²
中葉畠・ 一水口遺跡 (第8次)	奈良県生駒市 中葉畠2丁目 1073-3ほか	29209	34° 40' 42'	135° 42' 24'	20030521～ 20030630 20030731～ 20031024	1,500
中葉畠・ 一水口遺跡 (第10次)	奈良県生駒市 中葉畠2丁目 1129-1	29209	34° 40' 54"	135° 42' 20'	20041215～ 20041221	53
田原口城跡 (第7次)	奈良県生駒市 田原口町 919-1、920-1	29209	34° 42' 18"	135° 41' 37"	20050127～ 20050128	28
坂の口遺跡 (第1次)	奈良県生駒市 坂の口町 1069-1ほか	29209	34° 42' 14"	135° 41' 45"	20021007～ 20021010	20
所取遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
中葉畠・ 一水口遺跡 (第8次)	集落跡	弥生 古墳 中世	溝 溝	弥生土器、石器 土師器、須恵器 土師器、瓦器、陶磁器		
中葉畠・ 一水口遺跡 (第10次)	集落跡	弥生 古墳 中世	土坑 土坑、溝	弥生土器、石器 土師器、須恵器 土師器、瓦器		
田原口城跡	城館跡	弥生 中世 近世		石核、剥片 土師器、須恵器 瓦器、白磁 瓦質土器		
坂の口遺跡	生産遺跡	奈良 中世	河道 素掘溝	須恵器、土師器 須恵器、土師器		

生駒市文化財調査報告書 第23集
生駒市内遺跡発掘調査概要報告書

2005年度

2006（平成18）年3月31日

編集・発行 生駒市教育委員会
奈良県生駒市東新町8番38号

印 刷 橋本印刷株式会社
奈良県葛城市竹内365番地1

